HOKKAIDO UNIVERSITY

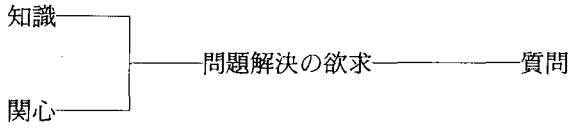
Title	知っていること、知りたいこと
Author(s)	植木, 迪子
Citation	独語独文学科研究年報, 20, 267-282
Issue Date	1993-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25964
Type	departmental bulletin paper
File Information	20_P267-282.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

知っていること、知りたいこと

植　木　迪　子

0．南(1985；39)は質問を「相手に対して、なんらかの問題を提示し、それについての情報の供給を要求する言語表現」であるとしている。また、Frier(1981)にとっての質問行為は、相手に対してある特定の知識に関する問題を解決するようにと提示する言語行為であり、質問者は知識に加えて特定の関心(Interesse)をも持ち合わせていなければならない、として次のようなモデルを示している(Frier 1981；42)。



このように質問とは、相手から情報を得るための言語手段と考えられていることがわかる。上にあげた理解に共通しているのは、質問が言語による営みであると考えていること、質問者が質問を向ける相手がおり、その相手から情報を獲得すること、また質問する方が情報を提供してくれる相手に対して「なんらかの問題」あるいは「特定の知識」を提示する点などである。質問のために用いられる言語手段の代表的なものが疑問文ないしは質問文とよばれる形式であるが、この質問文はどのような構造になっており、なぜこの言語形式を用いることによって質問者は自分の欲する情報を入手できるのか。質問者は自分の知識をどのように言語化して、知っていることと知りたいことを相手に伝えるのだろうか。このような点を中心として、質問について考えてみたい。そのために考察の対象とする疑問文はいくつかの種類に限られ、決して網羅的ではないが、それらを手がかりとして、話し手と聞き手がどのように特定の言語形式を用いて情報入手という目的を果たすのか、そのメカニズムの一端なりとも明らかにできることを願っている。

この考察の出発点として(1)にあげた対話をおきたい。この対話は創作されたものであり、自然な会話としてはいささか奇妙に思われる部分もみうけられるが、なぜ奇妙なのかということは小論の後半において明らかになるはずである。

(1)01　A　「時計をお持ちですか」

02　B　「はい、持っています。私の時計は3年前に友人からもらったものなんですが、それ
03　　以来一度も止まらないし少しも遅れないで、今でも時報にピッタリなんですよ。電
04　　池を一年に一回取り替えるようにということを聞いてはいるのですが、そんな必
05　　要もなくて、とてもありがたいと思っているんですよ。別に有名なメーカーでも
06　　ありませんしそれほど高い時計でもないんですが...」
07　A　「それはよい時計ですね。ところで、そのスバラシイ時計で、いま何時でしょう」
08　B　「いやぁ、実はけさ寝坊しましてね。いつもだと6時には目が覚めて、ゆっくりと
09　　食事をして身仕度して出かけるのですが、きのうは、例のホラ、ペルセウスですか、
10　　一時間に何百もの流れ星が見られるっていうんでしょ。いつもは12時前には寝る
11　　んですが、きのうはそういうことでずーっと起きていましてね。あぁ、時計でした
12　　ね。実はそういうわけで、慌てて出てきたもんだから、きょうは時計、忘れてき
13　　たんです」

1．質問の形

1．1．　上の会話をどのような観点から考えることができるだろうか。まずAの発話［(1：01)および(1：07)の後半］は質問であり、Bの発話［(1：02～06)および(1：08～13)］はそれに対する答えとみることができる。情報を入手するためには必ずしも疑問文の形をとらなくとも目的を達成できることはこれまでにも指摘されているし、またその逆に疑問文を質問以外の目的に用いることができることも知られている。[1] しかし、そのことは質問行為を遂行する代表的な言語形式としての疑問文そのものを、情報入手との関連で論ずること自体にとっては支障とはならない。ドイツ語ではこれまで動詞の位置、疑問詞の有無、文末の音調等によって決定疑問文、補足疑問文、問い返し疑問文、二者択一疑問文などの区別が行なわれている。また南(1985；42)は、日本語の質問に関して、「英語の質問形式でいうなら、yes-no question および wh-question の両方を含む」質問文を「通常質問文」とよび、相手からどのような情報を得ようとするかによって「確認質問」と「補充質問」を区別している。(1：01)のような「質問者の方から知りたいことがらを相手に示し、それについての相手からの情報を求めるもの」は確認質問であり、確認質問には、(2a)のような「単純質問」と(2b)のような「選択質問」以外に、(2c)のような間接質問とでも呼ぶことができるものも含まれている。

(2)　確認質問　(例は南1985;59f.による)

a．きのうBさんに会いましたか？

b．おまえ、きのうの会には出たのか、出なかったのか？

c．A君がこんど北海道に転勤すること、君知ってるか？

(1：07)のAの質問「いま何時でしょう」は、南の分類では補充質問に属する。このタイプの質問は「質問者が知らない点についての情報を求めるものである。別のことばでいえば、情報の穴うめを求めるもので」「質問の焦点（すくなくともその一部）が、質問者にとって知らないものとして表現されているわけで、具体的な形としては疑問詞（不定詞）を使うことが多いであろう。いうまでもなく、wh-questionの多くは補充質問の典型的なものである」(1985；59)。南は補充質問をも確認質問と同様に単純質問と選択質問に分けている。単純質問と選択質問の区別は、たずね方の違いにもとづいており、質問者が相手に示す事柄がひとつだけなのか、それとも複数の選択肢を示してその中から答えを選ばせようとしているのかによって分けられている。(3a)は単純な補充質問であり、(3b,c)は選択的な補充質問を示している。

(3) 補充質問　(例は南1985;60による)

a．だれと遊んだの？

b．大根とカブと、どちらを使いますか？

c．お酒はなにを上げましょうか、シェリー、それともポート？

単純質問・選択質問という区別は「補充質問と確認質問とは別の軸のもの」であり、(2b)や(3b,c)などに示される選択的性格が無視されることと、「選択的でないものの性格が積極的に示されずに終わってしまう」(南1985；60f.)ことを恐れて、このカテゴリーを設定したとしている。南は補充質問・確認質問、単純質問・選択質問に加えて第三の観点として描叙段階的・判断段階的という区別を設けて、この三つの観点を組み合わせて通常質問を分類しているが、ここでは先にあげた二つの観点とその関係のみをとりあげていきたい。

1．2．　ところで、確認質問の単純質問と選択質問は、それぞれに対する可能な答え通じて関連づけることができる。ここでいう可能な答えとは、ある特定の質問に対する妥当な答えの集合のことである。また、妥当な答えとは、情報に対する質問者の要求をなんらかの形で満たすような答えであって、「なぜ、そんなことを聞くの」、「それには答えたくない」といった種類の、質問者が求めている情報に直接関与しない答えは含まないこととする。

(4)a．おまえ、きのうの会には出たのか、出なかったのか？　(＝2b)

b．おまえ、きのうの会には出たのか？

c．はい、出ました。／いいえ、出ませんでした。[2)]

(5)a．きのうBさんに会いましたか？　(＝2a)

b．きのうBさんに会いましたか、会いませんでしたか？

c．はい、会いました。／いいえ、会いませんでした。

(4b)は、先にあげた選択確認質問（2b＝4a）の二つめの選択肢を省略した単純確認質問であり、(5b)は、やはり先にあげた単純確認質問（2a＝5a）に否定的な選択肢を付け加えた選択確認質問だが、これらの質問に対する答えは(4c)、(5c)で示されているように、単純質問の場合であっても選択質問の場合と同様に二つの可能性が示されて、そこからひとつを選択することになる。つまり、答えが提示する可能性から見た場合に、単純質問と選択質問は本質的に同じタイプに属する質問であって、単純質問は選択質問の一部が省略されたものと考えることができるし、また逆に、選択質問は単純質問において表現されていないもうひとつの選択肢が明示されたものと考えることもできる。このように見てくると、選択質問においては肯定的な可能性と否定的な可能性の両方が明示されているのに対して、単純質問では一方の可能性のみが明示されていることになる。このように、単純質問はいつでも必要があれば選択質問に拡大することができることから、確認質問と補充質問ではなく、むしろ選択質問と補充質問の二つを、疑問文の意味論において基本となる形と考えることもできる。[3)]

では、補充質問の場合はどうであろう。確認質問と同じように、単純質問と選択質問の可能な答えは同一のものであろうか。(6a)は選択補充質問であり、(6b)はそこから明示されている選択肢を除いた単純補充質問であるが、それぞれに対応する可能な答えは(6a)については(6c)であり、(6b)については(6d)と、同じではない。つまり、補充質問の場合には確認質問の場合とは異なり、選択質問と単純質問はそれぞれ別な答えの集合を要求する。選択補充質問に対する答えは、明示された選択肢のなかから選び出すことができるのに対して、単純補充質問には選択肢が明示されていない。したがって、このような単純補充質問に答えるためには、お酒の全ての種類のなかから飲みたいものを選び出して指定しなければならない。つまり、単純補充質問(6b)の可能な答えは質問の中で特定されている対象、この場合は「酒の種類」、の集合ということになる。

(6)a．お酒はなにを上げましょうか、シェリー、それともポート？　（＝3c）

b．お酒はなにを上げましょうか？

c．シェリーをください。／ポートをお願いします。

d．シェリー・ポート・ビール・ウィスキー・日本酒…をください。

ところで、(7e)もまた単純補充質問(7a)にたいする可能な答えのひとつである。先にみたように、補充質問の場合には単純質問と選択質問の答えは別のものであった。しかし、この

(7e)は、単純補充質問(7a)の可能な答えであると同時に、選択補充質問である(7b)の答えにもなりうる。このことから、すべての選択肢を否定するような答えは、選択、単純を問わずに補充質問の可能な答えに数えられると考えることができる。

(7)a．だれと遊んだの？　　(＝3a)
　b．だれと遊んだの、太郎くん、花子ちゃん？
　c．太郎くん・花子ちゃん・謙二くん・次郎くん・純子ちゃん・・と遊んだ。
　d．花子ちゃんと遊んだ。／太郎くんと遊んだ。
　e．だれも遊んでくれなかった。

ではこのような、明示されているか否かを問わず、選択肢の全てを否定するような形の答えは、先にあげた確認質問では考えられないであろうか。確認質問では、ある会に出席しなかった場合には欠席したこととなり、欠席しなかった場合には出席したこととなる。ある特定の人とは会う可能性と会わない可能性の二つしかない。出席か欠席か、会うか会わないかの二つが可能な答えの集合全体であり、このような場合には、一方を否定すれば他方が肯定されるという二者択一の可能性しか与えられていないことになる。しかし、確認質問のなかにも選択肢として肯定と否定の二通りの可能性しかとらないものの他に、(8a)のような選択肢をとる質問もある。(8a)は選択確認質問だが、単純補充質問(8b)と同様に(8e)を答えとしてとることができる。つまり、このような確認質問は全面否定を答えとしてとることができるわけである。この(8a)と先にあげた(2b)「おまえ、きのうの会には出たのか、出なかったのか？」を比べてみると、両方とも選択確認質問であるが、質問者が前提している事柄が異なっている。(8a)では、どこかへ行くことがすでに前提されていて、質問者が知りたいのはその行き先であるのに対して、(2b)では質問者は、相手が昨日の会に出席したのか否かを知りたがっている。人は様々な場所へ行くことができるのに対して、行くという行為そのものには行くか、行かないかの二つの選択肢しかないことは上で見た通りである。つまり、(8a)で明示されている選択肢は二つにすぎないが、その選択肢は任意に拡大される可能性を含んでいるものであって、肯定と否定の二つに限定されてはいない。ということは、(8e)，(7e)タイプの答えを容認するかしないかは、補充質問であるか確認質問であるかによるのではなく、選択肢の性質に基づくのではなかろうか。選択肢の種類は、「行く、行かない」のように、肯定と否定の二つに限られた可能性のなかからひとつを選び出すタイプと、「なに」、「だれ」、「どこ」などの疑問詞で表現できる対象を尋ねていて、明示されているかどうかは別として必ずしも二つの選択肢に限定されてはいないタイプに分けることができる。肯定・否定を問うものを選択確認質問Ⅰ、対象を問うものを選択確認質問Ⅱと区別することにする。

(8) a．あしたは遊園地へいくの、動物園へいくの？

b．あしたはどこへいくの？

c．遊園地へいくよ。／動物園へいくよ。

d．遊園地・動物園・水族館・デパート…へいくよ。

e．どこへもいかないよ。

このようなケースをも考えあわせてこれまでにみてきた質問の種類と答えとの関係を以下のようにまとめることができる。

(9)

		可能な答え
確認質問	単純質問　Bさんに会いましたか？	┌はい、会いました └いいえ、会いませんでした
	選択質問I　Bさんに会いましたか、会いませんでしたか？	┌はい、会いました └いいえ、会いませんでした
	選択質問II　Aさんに会いましたか、Bさんに会いましたか？	┌Aさんに会いました 　Bさんに会いました └どちらにも会いませんでした
補充質問	単純質問　だれに会いましたか？	┌Aさんに会いました 　Bさんに会いました 　… 　Zさんに会いました └だれにも会いませんでした
	選択質問　AさんとBさんと、どちらに会いましたか	┌Aさんに会いました 　Bさんに会いましたした └どちらにも会いませんでした

Bさんに会ったという肯定をp、会わなかったという否定を－pとすると、単純確認質問はp？、選択確認質問Iは(p ∨ -p)？、両方の可能な答えを{p/-p}と書くことができる。また選択肢をそれぞれa，b，c，…とし、前提の否定をϕとすると、選択確認質問IIおよび選択補充質問は(a ∨ b)？、その可能な答えは{a/b/ϕ}と表記できる。単純補充質問はWh？で表し、その可能な答えは{a/b/…ϕ}となる。上の表(9)をこの表記法を用いて書きなおすと(10)のよう

になる。

(10)

	質問の形	答えの形
確認	単純質問　　p？	{p/-p}
質問	選択質問Ⅰ　(p ∨-p)？	{p/-p}
	選択質問Ⅱ　(a ∨ b)？	{a/b/ϕ}
補充	単純質問　　wh？	{a/b/…/ϕ}
質問	選択質問　　(a ∨ b)？	{a/b/ϕ}

単純確認質問と選択確認質問Ⅰをひとつにまとめることができることは先にのべた。その場合と同様に答えの形、またさらに質問の形について表(10)を調べてみると、選択確認質問Ⅱと選択補充質問が、質問の形も答えの形も同じであることがわかる。したがって、この二つをひとつにまとめて選択質問とよぶことにする。表(11)が示すように、確認質問は、ある事がそうであるのか、ないのか、質問者は二つの可能性のうちのひとつをとりあげて、それについて相手に肯定か否定かの判定を求めており、それにしたがって、可能な答えの形も肯定か否定かになる。選択質問は、質問者が複数の、一般には二つの、選択肢を相手に示して、あれかこれかを問うもので、可能な答えはその選択肢のうちのひとつを選び出すか、あるいは選択肢全部の否定である。補充質問では、疑問詞の種類によって可能な答えの集合の枠が示されるが選択肢は明示されない。答えは、質問者が示した枠に所属する対象から選ぶか、あるいは全体の否定である。このようにして、南(1985)で分類されている通常質問を、可能な答えの形に基づいて確認質問、補充質問および選択質問の三種類に分類しなおすことができる。答えの形とは、すなわち質問者が求めている情報の形をあらわしているとするならば、この分類は求められている情報の性質に基づいた分類といえよう。

(11)

質問の種類	質問の形	答えの形
確認質問	(p ∨-p)？	{p/-p}
選択質問	(a ∨ b)？	{a/b/ϕ}
補充質問	wh？	{a/b/…/ϕ}

1．3．　サールは質問という発話行為は、質問者が「『答え』を知らない、すなわち、その命

題が真であるか否か、あるいは、命題関数の場合には、補充してその命題を真にするために必要な情報を知らない」状態にあり、相手から「この情報を誘発する試み」(Searle 1969；66)であるとしている。命題が真であるか否かを問う質問は、「イエスかノーかを尋ねる質問」(Searle 1969;31)であるから、われわれの分類としては確認質問に相当する。また、命題関数の場合とは、「そのパーテイには何名の人が出席していたか？」のような質問であり、その質問は(13a)の確認質問のように完全な命題ではなく、値の与えられていない変項を含んでいるために命題関数とみなされる。サールの表記法では命題を問う質問は(13a)、命題関数による質問は(13b)のようになる。

(13) a．？（君はそれをした）
　　b．？（X名の人がそのパーテイには出席していた）

「？」は質問としての発語内的力を表示し、括弧内の命題関数は変項Xをとる。(13b)の命題が真になるためには、変項Xに命題を真たらしめるような値が入らなければならない。これは、われわれの分類では補充質問に相当するであろう。補充質問はその名が示すように、変項の値を補うわけだが、この変項の性質を表示しているのが疑問詞である。疑問詞；いつ、なぜ、なに、だれ、どう、どこ等によって質問の対象が日時なのか、理由なのか、物なのか、人なのか、方法なのか、場所なのかが提示される。また、日本語の場合にはその疑問詞に続く格助詞；が、と、に、を等によって対象と動詞との関係が示される。このように、質問者は疑問詞で答えの焦点を指定すると同時に、自分が求めている情報の性質をもあわせて提示していることになる。また、疑問詞以外の部分では、質問者自身が前提している知識を提示している。たとえば、「だれと遊んだの？」という質問では、質問者が知りたい対象は人間(場合によっては生物）であり、相手が一緒に遊ぶという行動をとった対象は、一緒に遊べる人間の集合のなかのどの個体なのか、ということになる。

質問の対象となりうる命題は、サールが質問の命題内容規則で定めているように「任意の命題または命題関数」であるが、補充質問の答えとして可能な情報の傾向は最初からその形式によって指定されていることになる。これは、確認質問の場合も同様であって、質問者が、というよりはむしろ、質問者が必要とする情報が質問の形を決定し、質問の形が可能な答えの枠を決定するといえよう。この、知識の提示のしかたにおいて確認質問と補充質問は異なるわけである。

2．質問と対話

2．1．　これまで質問と答えを関連させて考えてきたが、発話という観点からみると、それ

ぞれの発話は別の人物によって発せられたものである。ふたりの人が行なった別個の発話をこのように関連させて一対のものとしてとらえることができるのはなぜだろう。

Schegloff/Sacks (1973)は対話のなかに一連の対になる発話が現れることに注目し、このような対になる発話を隣接対(adjacency pair)と名付けている。それは挨拶にたいする挨拶、要請にたいする承諾あるいは拒否、招待にたいする受諾や断り、呼び掛けにたいする返答などであって、質問とそれに対する答えはこの隣接対の典型とも呼べるものである。この対になっている二つの発話はいずれも二人の別々の人間が連続して発したもので、その間にはある関連が見られる。隣接対の発話には順序があって、先行する始発部(initial sequence)と後続の終結部(ending sequence)の二つの部分からなっている。先行する発話はそれに続く対となる部分を要求する。その際に先行する発話の形がそれに続く発話の形を決定することになる。つまり、挨拶に続くものとしては挨拶が要請され(14a)、質問に、それに対する答えではなく挨拶が続いたような場合(14b)には、終結部が欠落していることになる。

(14) a. A：おはようございます。
　　B：おはようございます。
　b. A：これ、おいくらですか？
　　B：こんにちわ。

発話が先行的であるかどうかは、質問の場合の統語構造や挨拶の場合の慣習的な用法などによって見分けられる(Shegloff/Sacks 1973；238f.)。質問は相手の言ったことやその一部をそのまま繰り返す問い返しの質問を除いては先行的である。問い返しの質問は(15a,b)のように平叙文と同じ統語構造をもち、文末の音調が上昇することによって質問として理解されるもので、それに先行する発話が必要である。

(15) a. A：ワァ、全部消しちゃった。
　　B：全部消しちゃった？
　b. A：Hans hat ein Haus gekauft.
　　B：Hans hat ein Haus gekauft?

統語構造が平叙文と同じである点、必ず先行する発話が必要である点などで、問い返し質問は先に扱った三種類の質問とは異なった特徴を示すものとみなすことができよう。

2.2. さて、質問がその意味構造において、答えと密接な結びつきをもっていることは先

に見てきたが、さらに疑問文固有の統語構造によってもまた、隣接対のうちの先行する発話であることを示して、答えとなる後続の発話を要求することがわかる。このように、言語構造によって示唆される、発現の可能性が高い言語行動のタイプがあるわけだが、それだけでは対話は成立しない。表(11)で示されている質問の形からみると、確認質問ではある命題についての肯定か否定かが問われている。質問者が言語化して示すのは、その一方だけの場合もあるが、そのような時にも質問者は選択肢が肯定と否定の二つだけであることを承知しており、自分が承知していると同時に相手もまたそのことを知っているであろうことを推測している。さらに質問者が予測していることは、それに加えて相手が、質問者自身は知らなくて、しかも知りたいと思っている情報をも知っているであろうということであり、質問者はこのような推測や予測に基づいて相手に質問をむけている。相手の知識についての予測や推測なしに質問行為は成立しない。Lewis(1969)はこのような、互いに共有していることを予測できる知識を共通知識(common knowledge)、Schiffer(1972；30f.)は相互知識(mutual knowledge)と名付けて以下のように定義している。

(16) SとAが互いにPであることを知っているということは、以下のようなことである。
1．SはPであることを知っている。
2．AはPであることを知っている。
3．SはAがPであることを知っていることを知っている。
4．AはSがPであることを知っていることを知っている。
5．SはAがSがPであることを知っていることを知っている。
6．AはSがAがPであることを知っていることを知っている。
以下同様に続く。

シッファーのあげている例にしたがえば、ふたりの人間、SとAが向かい合って座っていて、両者の間にある机の上には蠟燭の灯った燭台があるとすると、SとAの双方が互いに、机の上には燭台があることを知っていると考えることができるためには(16)で示されているような相互知識が必要になる。(16)にしたがって、Sの側からこのことがどういうことなのかを見てみると、まず、Sは机のうえに蠟燭があることを知っている(16：1)。またSは一般に、五感に障害のない人が目を開けていて、目の前のある程度の大きさの物を見ているときには、その人はその物が目の前にあることを承知しているものであることを知っている。さらにSはAが五感に障害がないことを知っていて、Aが目を開けていて、目の前にあるものを見ていることを承知している。したがって、SはAが机のうえに蠟燭があることを知っていることを知っている(16：3)。健常者についての上でのべた知識は、Sだけが所有しているもので

ないことをSは知っており、したがって、Aもまたこの一般的な知識を有していると推測できる。さらにSはAが、Sが目を開けて目の前にあるものを見ていることを見ており、したがって、SはAが、Sが机のうえに蠟燭があることを知っていることを知っていることになる(16：5)。シッファーの定義に従うと、相互知識が無限に続いていく点に問題があるのだが、それは理論上の問題であって、ある段階までは現実の言語行動の領域においてもこのような形の知識が作用しているものと考えることができる。

ところでサールは、このような相互知識という考え方は事柄を正しくとらえていないとして共同意図性(shared intentionality)という概念を提唱している。共同意図性の例としてSearle(1992;22)があげているのは次のような場合である。ふたりで車を押しているものとする。ふたりで一緒に車を押すということは、ひとりひとりがそれぞれに車を押しているのとは違って、ふたりが一緒に車を押していることの一部としてそれぞれが車を押していることになる。したがって、もし途中で相手が実は車を押しておらず、自分ひとりだけが車を押していたことが判明したとしたならば、それまでの相手がしていたことについての理解が誤っていただけではなく、自分がしていたことについてもまた誤った理解をしていたことになるわけである。なぜならば、それまでは、単に自分が車を押していると思っていたわけではなく、ふたりで行なっている共同作業の一部として自分も車を押していたと信じていたからである。Clark(1992；148f.)も握手という共同行為について次の三つの別々の行動が区別できると考えている。

(17)(a) アンとボブが握手している共同行為(collective act)；
(b) (a)の一部としてのアンの個人的行為(individual act)；
(c) (a)の一部としてのボブの個人的行為(individual act)。

個人的行為はさらに、ひとりだけで遂行できる自律行為(autonomous act)と、一緒に行為を遂行する相手が必要な参加行為(participatory act)に分けることができる。アンが水面に石を投げるのは自律行為だが、ボブとキャッチボールをするのは参加行為である。質問行為は最初に見たように、相手を必要とする行為であった。ということは、質問行為は共同行為であり、質問をする側は常に答えを提供してくれる相手を必要とし、しかも、その時共同で遂行している行為についての参加者の認識がある程度まで一致していなくてはならないことになる。

2．3．　ここでもう一度最初にあげた例(1)に立ち戻ることにしたい。先に(1：01)は確認質問であり、(1：02～05)はそれに対する答えであると言い、また(1：07)の後半は補充質問であ

って(1：08〜13)はその答えであるとも言った。たしかに(1：01)は確認質問として一般的な形をしており、(1：02)の「はい、持っています」もその質問に対する答えとして妥当なものである。またA(1：07)の補充質問に対する答えはAの求めていた情報を与えることはできないが、しかし、質問に対する誠実な答えではある。この対話がいかなる意図をもってなされたものなのか、三つの場合を考えてみよう。

まず、「時計をお持ちですか？」という質問の意図が時間を尋ねることにあったとしたならば、そして、そのことは(1：07)で繰り返される質問によって予想されるひとつの可能性であるが、Aは望んでいた情報を手に入れることができなかったのだから、この会話はAにとっては発話の目的を達成できなかったこととなり、成功したとは言い難いであろう。ある質問に対して形のうえでも意味の点でも妥当な答えが返ってきたにもかかわらず、質問者が望んでいた情報を入手できなかった最大の理由は、Bが情報を提供できる状態にいない、つまり、時計を所持していないために時間を告げることができなかったことにある。Levinson(1983;356)は話し手が本当に求めている事柄に先立って、しばしば予備的な要請を行ない、その場合にもっとも多く用いられるのは、相手が要請を受け入れる状態にあるかどうかのチェックであると指摘している。Aの質問(1：01)をこのような予備的質問と考えることができる。つまり、Aは直接時間を尋ねる代わりにBが時間を教えられる状態にあるかどうかを予備的にチェックしたのであり、AとしてはBが否定的な答えを与えたならばそれ以上の要請は行なわないはずであった。ところがBはAの意図を取り違えて、長々と自分の時計の自慢をはじめたので、Aは再度、より直接な形で質問(1：07)を繰り返すこととなる。このような場合、両者の間には共同意図は成立していないといえよう。また、B(1：02〜06)の発話はグライスの量の原則「発話に必要以上の情報量を与えるな」(Grice 1975；45)にも違反している。

通常のコミュニケーションにおいて話し手と聞き手は互いに向かい合って話をしている。ふたりは交互に話し手であると同時に聞き手でもある。話し手のほうは交替するが、聞き手としての立場は、自分が話し手である時にも続いている。つまり、話し手はつねに自分自身の発話の聞き手でもあるのが一般的である。このことによって話し手は自分の発話をチェックして、必要があれば途中で修正を加えることもできる。同時に話し手は、面と向かっている聞き手の表情やちょっとした動作や目の動きなどによって、自分の発話が相手にどのように受けとめられているかをチェックすることもできる。これは共同行為が続いているかどうかを参加者が絶えず確認しているということであり、あいづちは、その中でも、話を聞いていることを知らせる合図として重要なもので、話し手にまだ話し続けてもいいかどうかを知らせるという役割を果たしている。[4] 話し手は、聞き手の反応と自分の発話を突き合わせて、ある部分をわかりやすく言い換えたり、相手の注意を確認したりする表現を随時挿入することができる。(1)の会話においては、このようなあいづちや応答詞などが完全に欠落している。

もし、これが実際におこなわれた会話であったならば、Bは相手の反応によっていちはやく自分の勘違いに気付いていたことであろう。

次の可能性として、もし、パーテイの席上で時間をつぶすために差し障りの無い話題を探していたような場合には、AにとってBの反応はむしろ歓迎すべきものであったと考えることができる。このような場面では、BはむしろAの反応次第では自分の発話をさらに続行させたかもしれない。

さらに第三の可能性として、AがBの腕に時計がないことに気付いて、Bに時計を買うことを勧める目的で(1：01)を発したのであるならば、(1：13)までの段階では、Bに二つめの時計を勧める余地が少なくともまだ残っているわけで、そこまでの進展はBにとって必ずしも不都合なものではないと考えることができる。しかし、ほとんどの人が腕時計を持っているのが当然のようになっている社会で、相手に時計を買わせようという意図をもった者が(1：01)のような形で商談を始めるのは、いささか不自然ではないだろうか。八百屋の店先で「奥さん、茄子も持っていかない。漬物にしたら美味しいよ」と声をかけるのとは異なり、一般に時計とは、多少とも値の張るものであり、そうであれば売る側はもっと別な形を選ぶほうが成功率が高いとも思われる。では、高価なものを売る場合には数百円のものを売る場合とどのように異なる言語行動をとるのであろう。

Keim/Schwitalla(1993)はマンハイム市内の婦人グループの言語行動を分析して、コーヒーがほしいと要求したり、窓をしめてくれるように頼むなど、相手に負担をかけない些細な依頼や要求の場合には直接に表現し、相手に時間をとらせたり、何かを諦めさせる結果となるような負担の大きな要求の場合には、複数の段階をふむ複合的な言語行動をとっていることを指摘している。時には、予備的条件のチェック、予備的条件の承認、要求の提示、要求の成就という4段階をふむことさえあるという。(18)は、毎週手芸のために集まる40代から70代の婦人グループにおいて、指導者であるKR夫人に対して、もうすこし手芸材料が欲しいと話しかける例である(Keim/schwitalla 1993；132)。

(18) 01 KU: is do noch was drin ↑ isch kennd noch was
02 KR: ja * noch e bissl
03 KU: brauche
04 KR: schaun se ma ob se noch was passendes finden

(18：01)で、手芸グループの一員であるKUは、指導者のKR夫人所有の毛糸の入った箱を指差して、まだ毛糸があるかどうかを尋ね(予備条件のチェック)、KR夫人がこの質問に肯定的に答えると(18：02)、予備条件が承認されたことを確認して、はじめて本来の目的で

ある「毛糸がもう少し欲しい」という要求(18：01、03)を持ち出し、この要求がＫＵ夫人によって承認される(18：04)という経緯をたどる。地元の新聞社の取材に対して、自分も写真に載せてほしいという、グループの他の会員を差し置いての要求を直接的に表現したために、グループの主だった会員から一笑に付されて全く相手にされない例(Keim/Schwitalla 1993; 136)や、より切実な願望ほど冗談めかした表現を用いたり、相手が拒絶しやすいように些細なことであるかのように見せ掛けるなど、会話の方策は多彩である。

3．質問という言語行為は、質問者が求める情報を入手するために用いられるのが、その統語および意味上の形から考えて典型的な使用法である。しかし、この言語表現が機能するためにはさらに多くの観点が考慮に入れられなくてはならない。本稿では、質問の形と答えの形がひとつの対をなすものであるという考えに基づき、両者がどのような関わりを持っているのか、両者の関係に基づく質問の分類、また、質問という行為をその機能の面から考えたときに主要な役割をはたす、話し手が交替するときに働く様々な要因、相互知識や共同行為さらには共同意図という考え方、また、話し手が発話的を遂行するために用いる様々な方策を見てきたが、コミュニケーションはこれらの多様な契機が複合的に作用しあって成立しているものである。その複雑なメカニズムの解明にはさらなる研究が必要であるが、近年のヨーロッパにおける国際語用論学会や国際対話学会の設立とそれにともなう国際的活動などにみられるように、国境や個別学問分野を越えた研究が徐々に集積されて、人間の言語行動についての新たなる知見に期待できる状況が確立されつつある。Searle et al.(1992)に収められているような、これまで交流があまりなかったと思われる理論分野と実践的経験的な研究分野の研究者の交流および真摯な討論の成果に期待したいと考えるのは筆者ひとりではなかろう。

注

1）この点についてはWunderlich(1976；181ff.)および植木(1988)参照。

2）日本語の応答詞「はい」「いいえ」は、ドイツ語の確認質問の答えにおけるJa, Neinにくらべて義務的である度合いがはるかに少ない。「はい」と「ええ」の関係については北川(1977)およびKitagawa(1980)参照。

3）Hamblin(1973)やKarttunen(1977)はこのような立場をとっている。

4）あいづちについてはメイナード(1986)、(1987)、(1993)および堀口(1991)参照。

参考文献

Austin, John L. (1962) : How to Do Things with Words. Oxford(Clarendon).

Brown, Penelope/Levinson, Stephen(1987) : Politeness. Some universals in language usage. Cambridge (Cambridge University Press).

Clark, Herbert H. (1992) : Arenas of language use. Chicago (The University of Chicago Press).

Cole, Peter. /Morgan, Jerry L. (eds.) (1975) : Syntax and semantics, vol. 3: Speech acts. New York (Academic Press).

Grice, Paul H. (1975) : Logic and conversation. In : Cole/Morgan(1975) : 225-242.

Hamblin, C. L. (1973) : Questions in Montague English. Foundations of Language 10. 41-53.

堀口純子(1991)「あいづち研究の現段階と課題」『日本語学』第10巻第10号：31-41。

Karttunen, Lauri(1977) : Syntax and semantics of questions. Linguistics and Philosophy 1. 3-44.

Keim, Inken/Schwitalla, Johannes(1993) : Formen der Höflichkeit—Merkmale sozialen Stils. Am Beispiel zweier Frauengruppen aus unterschiedlichen sozialen Welten. In : Janota, J. (Hrsg.) : Vielfalt der kulturellen Systeme und Stile. Vorträge des Augsburger Germanistentags 1991. Tübingen (Niemeyer). 130-145.

Kitagawa,Chisato(1980) : Saying "yes" in Japanese. Journal of Pragmatics 4. 105-120.

北川千里(1977)「「はい」と「ええ」」『日本語教育』33号：65-72。

Levinson, Stephen C. (1983) : Pragmatics. Cambridge (Cambridge University Press).

Lewis, David(1969) : Convention : A Philosophical Study. Cambridge (Mass.) (Harvard University Press).

Maynard, Senko(1986) : On back-channel behavior in Japanese and English casual conversation. Linguistics 24. 1079-1108.

メイナード・K・泉子(1987)「日米会話におけるあいづち表現」『月刊言語』16巻11号：88-92。

メイナード・K・泉子(1993)「会話分析」くろしお出版。

南不二男(1985)「質問文の構造」水谷静夫編『文法と意味II』朝倉書店。39-74。

Sacks, Harvey/Schegloff, Emmanuel(1973) : Opening up Closings. Semiotica 8. 289-327. (In : Turner, R. (1974) : 233-264.)

Searle, John R. (1969) : Speech Acts. Cambridge (Cambridge University Press).
Searle, John R. (1975) : Indirect speech acts. In : Cole/Morgan(1975) : 59-82.
Searle, Johh R. et al. (1992) : (On) Searle on Conversation. Amsterdam (Benjamin).
Shiffer, Steven. (1972) : Meaning. Oxford (Clarendon).
Turner, Roy(1974) : Ethnomethodology. Harmondsworth (Penguin).
植木迪子(1988)：「疑問文、質問、返答」『テクスト分析の研究』昭和62年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書。23-30。
Wunderlich, Dieter(1976) : Studien zur Sprechakttheorie. Frankfurt a. M. (suhrkamp).
Wunderlich, Dieter(1986) : Echofragen. In : Studium Linguistik 20. 44-62.

(文学部教授)